

アービアス

ganzi

Illustration
菅野アキ

汚い地面の上で僕は目覚める。空が見えない。四方は木で出来た仕切りのような物で囲まれていた。木と木の隙間から漏れる光が僅かに僕を照らしている。鋤や鎌など農具が壁に立てかけられている様子から見ると、どうやら、どこかの納屋らしい。三十センチほど前方に木製の扉がある。空気は赤黒く、濁っていた。

蹲っていた身体に力を込める。身体が軋む。ゆつくりと立ち上がり、息を吐く。赤黒い空気の中に僕の息が透明に浮かび上がった。

伸びきった前髪を手でかき上げる。視界良好。扉を横に引いて開けた。

「おめでとう」

外で翼の生えた女が僕を待っていた。女のブロードの髪は肩にかかるほどの長さで、緑色の汚れたローブを身に着けていた。靴はなく、裸足。翼も所々

茶色に染まっていた。綺麗な顔にも土がついていて汚れている。その姿は何故だか僕を悲しませた。

涙までポロポロと零れ出す。

彼女は虚ろな顔で僕に問いかけた。

「どうしたの、どうして泣いているの」

「わからない」

僕は涙を拭うこともせず、目の前の女に語り掛けた。

「君のその格好は？」

「怖いものから逃げている途中でこうなったの」

「その怖いものはもう、いないのか？」

彼女は首を縦に振った。

「大丈夫、もういない」

僕は安堵した。安心すると同時に自分が畑に囲まれている細い道の上に立っていることに気がつく。続いて自分が穴のあいたポロポロの黒い半袖の上着と黄色と緑を足したような色のポケットが多くついた長ズボンを穿いていることを認識した。鞆を襦

掛け^がにしている。そして僕もまた裸足だった。

彼女はちっとも嬉しくなさそうにもう一度言う。

「おめでどう」

「何がおめでどう？」

「あなたは、今、生まれたの、この世界の上に、だからおめでどう」

西暦二三〇五年、十月、汚い納屋の中で僕は生まれた。

彼女の名前はミカナルと言った。神の指示の下、それを人間に伝え、導く者、案内天使というらしい。だから、神に創造された人間の僕を導くという。

「あなたにはこれから地上にいる天使を殺してもらおう」

畦道^{あひみち}を歩きながら言われたその言葉に僕は首を傾げた。

「どうして」

少し困ったように、彼女は眩^{つぶや}く。

「言葉やその概念は理解できるように創^つってあるのだけれど」

「でも、僕は知らない」

「……そうね、理由は知らないものね」

ミカナルは僕の二、三步前に出て振り返り、空を指差した。

「異物を世界は長い間、受け入れられない。だから地上は瘴^{しょうき}気に包まれたの。赤黒い空気に包まれ、地上の生物も変容し、変容についていけなかった人間も神に創造されたあなたを残し、全て絶滅した」

「その異物って？」

彼女は悲しげに自分自身を指差す。

「天使。この地上にとって天使の吐く息は瘴気になる。人間を死に至らしめ、生物の変異を招く。だから、この地上にいる天使を全員殺して欲しいのよ」

『殺す』、意味及び、概念は理解している。作為的に命を奪うこと。『死』。

「殺さなければダメなのか」

「ダメ。この地上に慣れてしまった天使達は天界でも瘴気を吐き出す。どつちの世界も彼らを受け入れられない」

一応は理解した。

「わかった。では、もう一つ質問していいか」

「どうぞ」

「……人間である僕が天使を殺さなければいけない理由を教えて欲しい」

彼女は躊躇うように一呼吸おいて口を開いた。

「この世界にどうして天使が住みついたと思う？」

僕は生まれたばかりの少ない知識で考える。しかし、特に思い当たることがない。

「わからない」

瘴気を吐き出し、ミカナルは悲痛な声で言った。

「——人間が大好きだから」

「大好き？」

「そうよ。彼らは人間が大好きなの。好き過ぎて異

常なの。当時の私達、天使は自分達が人間に対して害を与える生物ではないと思ひ込んでいた。

だから、天使であることを隠しながら人間界と一緒に生活しようとする者が出てくる。一人くらいなら世界は受け入れられたわ。でも人間が好きな天使は存外多くて、約八百万の天使が人間界に住み着いてしまったの。瘴気は徐々に広がり、やがて世界中を覆った。気づいたときには既に遅くて、どうすることもできなかった……」

そして人間は絶滅した。

「地上慣れして元の世界に戻れない彼らはそのまま地上に住み続けたわ。でも、そうすると地上はどんどん穢れていく。もういい加減、地上をあるべき姿に戻さなければいけないというのに」

ミカナルが緑のローブから布で包まれた短剣を取り出し、僕に差し出した。

「彼らがかつて愛した人間であるあなたが殺す。これが彼らに対する最大の罰。この短剣で彼らの人間

への愛を切り裂いて」

手に持った短剣は見た目以上に重かった。

僕とミカナルは初仕事に取り掛かるため、『亡霊都市ミルバ』に向けて歩いてきた。

天使であるミカナルは食料を必要としないが、僕には喉のどの渇きや空腹が存在する。ここには僕の知識にあるマーケットなる物が何一つ存在しない。従って、自分で食料を調達しなければならぬ。

僕はミカナルに一つ一つ罫の作り方や、短剣の使い方などを教えて貰い、狩りを覚えた。

食べた生き物は全て泥の味がした。でも、栄養はあるから無理にでも食べるように言いつけられ、我慢して食べた。不足している知識は夜間にミカナルに教えて貰った。こうして僕は生まれたばかりの世界に急速に馴染なじんでいった。

亡霊都市ミルバに到着して驚いたのは建物の高さだった。天にも届くような高い立方体の建物。窓が等間隔に大量に壁についている。『ビル』というものだ。人がいなくなつて随分経つのか、どれもこれも薄汚れて見える。さらにその上にドーム状の屋根があった。この都市は一つのドームとなつていゝらしい。

「人間はどうしてこんな高い建物を造つたのかしら。悪趣味よね」

アスファルトで出来た道を歩きながら、ミカナルはビルを見上げ眉を顰ひそめた。生まれたばかりの僕に同意を求められても困るし、何より僕が答えを知ることがない。わからないという意を伝えると彼女は「そうよね」と呟つぶき、

「そういえば、昔、会った人間に『どうしてこんな高い塔を人間は造るのか』って尋ねたことがある。その時、彼はこう言った。『きつと神様に会いたか

「つたんだ」と

「それで？」

彼女は僕を見て、「それだけの話よ」とどこか寂しげに言った。

ミカナルが道路の中央に歩いて行き、真ん中の白線の上を歩き始めた。何かのおまじないだろうか。

「何をしている？」

「見てわからない？ 真ん中の白線を歩いているの。ただ歩くだけじゃつまらないから」

それだけの理由でミカナルは白線を歩いていく。無駄に体力を使うだけだと思う。後ろにある翼で飛ばば楽なのに、とも思うのだけれど、僕の数度に合わせてくれているのだから、そういうことは言わないでおこう。

ミカナルはプロンドの髪の毛を揺らし、恥ずかしげな笑みを浮かべる。

「あなたもこちらに來ない？ 結構、楽しいから」

ミカナルの横顔は明るく、心なしか嬉しそうだった。

た。路側帯から道の中央に移動し、ミカナルの隣を歩く。

足元を見つめ、一心不乱に歩を進めるミカナル。ミカナルはまだ裸足だった。この都市に來るまでに町らしい町がなく、僕はまだ靴を入手することが出来ていなかった。

「足、どうにかしなくちゃ」

僕が言うと、彼女は「心配してくれてるの？」と目を丸くした。

「僕もミカナルも足が悪くなると、どこにも行けなくなる。靴が必要」

ミカナルはうん、と頷く。

「それなら、民家跡から勝手に靴と服を貰っていきましよう」

僕は都市部の住宅街にある大きな庭つきの屋敷の中に入った。立派な門までついているのだからよ

つぽど金銭に恵まれた人達が住んでいたのだろう。

「あなた用の靴が早速あった」

ミカナルが玄関に散らばっている靴の一足を指差した。黒地に白いラインの入っている靴のスニーカー。足の大きさも見たところ合っていそうだ。埃をかぶっているのので、少し洗った方が良さだろう。ミカナルも適当に自分用の靴を選び、次は服を選ぶために足を洗わないまま家上がった。

屋敷の中は物で溢れている。生活感の溢れる部屋ばかり。埃っぽい屋敷内を歩きまわり、僕達は各自、自分に必要な服を探した。僕は二階の男の部屋らしきところからジャージといわれる物と、上下の服を一式貰うことにした。彼の部屋にはパソコンといわれる物や、マンガといわれる物がある。

初めて見る物ばかりなのに、僕はそれらがどういう物か知っている。神様が創った個体だから、人間の使っていた知識は大抵入っている。——どうにもしっくり来ない。

初めて見る物なのに見ただけでそれが何かわかってしまう。気持ち悪い矛盾。それが僕の中に幾つも溢れている。

突然、ノックの音がし部屋の扉が開いた。ミカナルが手ぶらでそこに立っていた。

「ねえ、今日はここを宿にしましょう。もう日が暮れる」

言われてみると、もう外が薄暗くなっていた。

「そうしよう」と僕は頷き、「良い服は見つかった？」と尋ねる。すると、ミカナルは首を横に振った。

「いいえ、どれも私のサイズには合わなかったの。どうやらここに住んでいた女の人間、太っていたみたい。また日を改めて別の所で服を探すことにする」

ならば、自分の分だけでも手に入れた服と靴は洗っておこう。水を汲めるところがあればいいのだけだ。

服を持って、一階に下りると、そこに何か居た。赤黒い空気の中、何か透明なものが浮かび上がっている。よくよく見ると人型だ。少し横に大きい。その人型が僕に向かって透明な右手を差し出した。

「……これは？」

「亡霊よ。おそらく、この屋敷の人間の魂でしょうね。夜になったから出てきたのかしら」

淡々と驚いた様子もなく説明するミカナルは亡霊を通り抜け、前に出た。

「居間に行きましょう」振り返り、言われる。

僕はその場を動かさず、亡霊を凝視した。

「どうしたの？」

「亡霊は……服を返せと言っているのか？」

ミカナルは首を傾げ、「わからない」と言い、

「仮に返せと言っているのだとしても、その必要はない。亡霊は何もできない。その地に縛られるだけの可哀想な存在だから」

僕は何故か申し訳なくなつて、亡霊の手に持つて

いる服を差し出した。受け取ろうとした亡霊の腕からスリと服が落ちる。亡霊は床に落ちた服を取ろうとするが、虚しく手がすり抜けるだけ。それを何度も繰り返している。

——触れようとしても、触れられない。

「すまない、貰つて行く」

僕は一言そう言い、服を拾い上げた。

屋敷の庭にあつた池で下着以外の服と今日手に入れた靴を洗い、保存用の干し肉を食べた後、僕は畳の部屋に布団を二組敷いて、そこで寝ることにした。

肌着だけを身につけたミカナルが変な人形を抱えて部屋に入つて来た。

「変な物を見つけた」

端的に述べたミカナルが僕に奇妙な人形を見せつける。女の子の西洋人形。それだけなら普通なのだ

けれど、その人形の口がパクパク開いたり閉じたりしている。

「なに、それ？」

「珍しいでしょう？　こんなの滅多に見ない」

「貴重な物なのか？」

「まあね。魂の入った人形なんてそうないわ」

魂の入った人形？

「その中には人間がいるのか」

ミカナルは人形を抱いたまま、自分の布団に正座して、膝の上に人形をそっと載せる。

「たまにいるの、こういう亡霊が。亡霊というのは、自分が死んだことに気付かず過ごしている者が多いんだけど、稀まれに、自分が死んでいることに自まずと気付いてしまう亡霊も出てくる。その亡霊は地に縛られていることも知り、絶望に落ちる。そうしたら、その亡霊はどういう行動に出ると思う？」

「……何とか現状を打破しようと考えてるだろう。方法はわからないけれど」

「正解。方法は、手っ取り早く生きている者に憑ひょう依するのが一般的。でも、この都市では生き物がほとんどいない。だから、試すのどうね」

「何を？」

「無生物に憑依することを」

冷めたように言った彼女の目から同情の色が窺うかがえる。両手で人形を掲げ、「可哀想……」彼女は咬くはいた。

「無生物に入れば、もう外には出られないのに」

西洋人形の髪を撫なで、ただ、彼女は同情の眼差しを人形に送る。僕は思う。

——この人形はきっと『助けて』と言っているのだろう。

閉塞した空気が、蝕くまれた天使……

続きは『Powers Selection - 新走 - 』と!!